

平成29年度 まちづくり懇談会

北山地区会場の要旨

平成29年11月6日（月） 19:00～21:00

北山地区コミュニティセンター 参加者 71名

市長：改めましてこんばんは。今日は一日穏やかな良い天気でしたが、だいぶ冷え込んでまいりました。今年はインフルエンザも流行っているようでございますし、ワクチンが足りないということだそうでございますので、是非体調管理には十分ご注意をいただきたいと思っております。本日はそんなお寒い中、またお疲れのところ平成29年度まちづくり懇談会にご出席をいただきましてありがとうございます。日頃より茅野市のまちづくり、ひとづくりにはお力添えをいただいておりますことに、改めて感謝を申し上げます。昨年のまち懇では「大いに語ろう、茅野市の未来予想図」ということで、これからのまちづくりについて皆さんのお考え等をお聞きしました。そのことを還元する中で、茅野市は来年度から始まる第5次茅野市総合計画作りに取り組んでおります。今日はその基本的な指針と言いますか5次総について皆さんと意見交換をさせていただきまして、更に5次総に反映していきたいと思っております。また後段では「北山地区の魅力」は何だろう、またそれをどう活かせば良いまちづくりができるか、そんなことについて皆さんが普段お考えや思っていること等についてお話をお聞きできればと思っております。短い時間ではございますが有意義な時間にしてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

企画部長：続きましてこのまちづくり懇談会は、北山地区コミュニティ運営協議会との共催で実施をしております。それでは北山地区コミュニティ運営協議会会長、田村一司様よりご挨拶を頂戴したいと思います。

北山地区コミュニティ運営協議会会長：皆さんこんばんは。コミュニティ運営協議会の会長ということでございますけど、この北山におきましては前年度区長会長をやった者がこの会長をなさいます、ということになっております。ですからそんなに詳しい訳でもございませぬし、この道のプロフェッショナルということでもございませぬ。しかし区長を昨年1年間やらせていただいた中で、この北山コミュニティの活動の中で大勢の方が親身になって行動を起こしてやっていることは確かに感じました。北山の区長会で大きな問題等を持ち寄って話している訳ですけど、茅野市の他の地区においてはこのコミュニティ運営協議会が諸問題等を話合って解決している所も多いということも知りました。北山は年度で会長が変わってまいりますので、やはり継続した方が良い面もあるでしょうし大変なこともありますので、区長を経験された方がやるということは大変良いことだと思っております。この北山は観光地方ですけど、皆さんご存じのとおり8月の一番良いときがあつた雨。10月にその分頑張るぞと思ったらこの雨・台風。えらいことになっておりまして、北山はどうしても後ろ向きになりがちな地域になっておりま

す。小学生の数もものすごい勢いで減っておりますし、北山は茅野市の中で高齢化率が今年1位になりました。10地区の中で1位です。今まで金沢や泉野に負けておりましたけれども、1位になってしまいました。40%を超えている所が糸萱さんと柏原さんがなってしまいました、名前を出しておりますけどたいした差はありません。従ってこの少子高齢化の問題がこれから本日も出されると思いますけど、北山が何とか解決すれば茅野市を救うことができると思いますし、今日来るときにテレビで消防団が足りないという所を見られた方もいると思いますけど、この北山も昨年一つの消防団が消滅してしまいました。これは人数が少ないということですが、65歳の消防団員で息子も入っているというおりましたけれども、もうそんな時代かなと思っております。今日はいろんな意見を出していただいて、良い話になればと思います。遅れましたけれども、市長さんはじめ行政の皆さんいつも大変お世話になっております。よろしく申し上げます。

－テーマと資料の説明 内容は米沢地区を参照－

市長：それではこの5つの指針に沿って意見交換をさせていただきますけど、先程の将来像に対する意見であったり、人口減少に対しての意見だったり特別制限はしませんので、皆さんが普段お感じになっていることを意見交換してまいりたいと思います。よろしくお願ひいたします。

まず「地域やあらゆる世代で支え合う仕組みづくり」ということで、今日で言えばコミュニティ、特に地区のコミュニティもそうですけどもっと身近な区・自治会のコミュニティをいかに活性化していくか、支え合いの仕組みを作っていけるかということになるかなと思います。逆にそこに住んでいる皆さんのいろんな役割というのも多くなっていくということ。よく区・自治会において役の担い手がないから役員を減らしたらどうか、もっといろんな仕事を少なくしたらどうかというご意見をお聞きいたします。それも確かにございます。その片方でお互いその中で支え合う仕組みを作っていかないと、本当にコミュニティが崩壊と言いますか寂しいものになってしまうということも片方にはあるかなと思っております。かなり切実な問題になってくるかと思いますが、皆さん普段お感じになっていることございましたら、何なりとご発言をいただきたいと思います。

糸萱の方で農協の後のサロンの状況をお聞かせ願えればと思います。どなたかご発言していただいけませんか。

市民：大変お世話になっていて、ほとんどの改修工事とか全部というぐらいできたと思います。今言われたサロンの件ですけど、サロンを使っているのは年間で40件以上はあると思います。今、高齢者支援団体が個々になってやっていただきまして、この間も昼食会とか大勢のお年寄りの方に集まっていたいただき開催させていただきました。本当に皆さんに行事の中ではとても好評にやらせていただきました。小さい子供も来てそこで勉強したり、自主的にやっている方も

います。村としてはサロンを作って良かったと思います。

市長：ありがとうございます。わざわざこの日という行事は日程が合わなかったりする訳ですけど、常にそこが開いているということが一つのポイントになっているかなと思います。ただ人が集まるということになって、特に子供さんが来るとなると事故があったときの責任はどうするんだとか、そうは言っても現実的な課題も出てくるかと思います。そういったことを皆さんと知恵を出して良い仕組みにしていかななくてはいけないと思っています。糸萱さんがそんな形でやっていただいておりますし、市内2、3の区では公民館を使ったそんな取組も始まっています。そんなところも参考にしながら良い形で居場所作りができればなと思います。

今、北山地区では食料品とかのお店は残っていませんか？ないですね。

市民：湯川にはお酒と乾物ぐらひはあります。

市長：生鮮食品とか農協さんもないでしょう。山浦の方は本当にはないですね。そういった買物弱者の対策ということで、金沢地区なんかも店がなくなって買物バスを宮川と共同して運行していますけど、そういったことへの支援とかも大きな問題になってまいります。ただそういった食料があれば良いのかということよりも、買物に行くということでの社会参加みたいな意味も多いにあるかなと。では北山地区としたらどうしていくかという課題も、居場所の中で良いアイデアが出たら面白いかなと思います。地区の象徴がある意味小学校かなと思います。区・自治会の象徴というやはり公民館かなと思いますので、その象徴である公民館が上手く活用できたら一番区民にとっても利用しやすい、遠慮しなくて行ける場所になるかなと思います。一応テーマ毎に進めて参りますので、立ち戻って意見を言っていただいてもかまいませんので、よろしく願いいたします。

2点目の「まちの活力の向上を図る仕組みづくり」ということで観光を切り口としたまちづくり、これは田村会長がDMOに関わっておりますので、私が言うよりも「面白いぞ」というのを言ってもらえればと思います。

北山地区コミュニティ運営協議会会長：DMOというとなかなか分かりづらいんですけど、茅野市だと「農業」、先程言われた「ものづくり」なんかが主体だと思いますけど、「観光」を主に考えて茅野市もまちづくりをしたらどうなんだろう、という考え方の一つだと思います。オリンピックまでに4000万人海外のお客様を日本に入れたら、日本のものづくりよりも観光に携わる金額が多くなるそうです。ですからこのまま日本が4000万人の観光客を海外から入れることができれば日本もガラッと変わってくるような期待ができるために、国の方から補助金をいただいて「DMO観光まちづくり」を進めております。大勢の方に協力していただいて、もう何千万というお金が毎年茅野市にきて、そのお金を基に観光を中心に。また北山は観光地に携わっている方が多いので、観光が元気になれば人口も増えると思います。私が小学生の頃は

滝の湯というホテルだけで北山小学校に20人以上通っていました。それが今は一人もいません。蓼科全部で3人しか通っていないという。全部で40人ぐらいの小学生が、観光が良いときは通っていた訳ですけど、今は蓼科から全学年で3人です。ですから北山の場合、私の考えですけど観光が発展すれば人口も増えて、住む人達も若い人が来ると結婚もして住む所も増えて、良い感じになるんじゃないかなと思っています。ですから観光のまちづくりを一生懸命やっていますが、皆さんにも少しでも目に見えるような成果が出るのではと思っています。

市長：ありがとうございます。「DMO観光まちづくり推進機構」という形で立ち上げていますけど、一つ勘違いをしないでいただきたいのが、そこが何でもしてくれる訳ではございません。そこを活用して皆さんで観光を切り口としたまちづくりに取り組んでいく、簡単に言うとそんな仕組みになるかと思います。そんなことで是非皆さんのアイデアを推進機構の中に反映していただければありがたいかなと思います。観光に限らず、ご発言がございましたらどうぞ。

市民：私が特に観光に関係して思っていることは、茅野市に来られている他県の出身の方で地域おこし協力隊の皆さんがいらっしゃるのですが、皆さんはそれぞれの茅野市の魅力を自然の面にしても茅野市に住んでいる皆さんの生活ぶりにしても、そういう中に溶け込んで今茅野市にはどんな魅力があるのだろうかと勉強、発掘されている。とても努力されているなど感じています。協力隊の皆さんの立場というのは他県であったり今までいろいろな仕事の経験もあったり、外部の視点と言いますか、広い視野で見えるものを持っていらっしゃると思うので、とても貴重な位置にいらっしゃる人達だと思います。その協力隊の皆さんの努力とか活動とかそういうものを茅野市民がどのように感じて、広めて、伝えてもらって、外部の皆さんがどんなことを感じたか。協力隊の皆さんと茅野市民をどう繋げていく考えをお持ちかお聞きしたいです。

市長：ありがとうございます。今地域おこし協力隊と正確には集落支援という方もいらっしゃいますけど、協力隊の方は13名います。あと2名で15名を採用する予定でいまして、この方達の給料は3年間国から交付税として入ってきます。ただ3年なんですよね。その先は自分で食べていける道筋をつけなさいよと、簡単に言うとそんな仕組みで来ています。茅野市の場合先程言ったようにDMOまちづくり推進機構を立ち上げていきたいということで、その戦力として採用しています。その中には組織を構築することに長けた人間がいたり、先程おっしゃっていたように地域に入ってどんな体験プログラムみたいな商品ができるか試行錯誤している訳でして、そういうことが長けた人間がいたり。当然ですけどかなり専門的な知識を持った人間を採用しています。今、具体的に動いているのは柏原、笹原、金沢地区、泉野も少し絡んでいます。そういう中でどういった農業体験ができるか、例えば玉川で言うと鋸の作業を3軒ばかりですけど、そういった所のどう体験プログラムができるかどうか。まだ確定したものはこれからになりますけど、どう市民に知らしめていくかということでございますけど、広報ちのでは毎号プロフィールとかやっていることを紹介しています。例えば今言いましたように

柏原も何回か行って区民の皆さんと農家体験等の取組も研究している所でございます。呼んでもらうとその区に行って「こんなことしています」、逆に「こんなことはございませんか」と交流もしているところです。10人が金沢のサンコーポラスという市の住居に住んでいまして、昔の雇用促進の住居でしたけど入居率が低いものですから、協力隊の皆さんには茅野市の住む所は是非そこに住んでという形で。金沢地区の皆さんとはついこの間のとろろ選手権にも何名か出席していただきまして、地域の皆さんとの交流も図っております。こうしなくてはいけないという形ではなくていろんな交流ができますので、観光まちづくり推進室に声をかけていただきますと喜んで飛んでいくかと思えます。またそこでいろんなご指導いただければと思います。非常に前向き取り組む連中ですので、話していても気持ち良いですし、外から見たいろんな話もしていただけますし、感じた茅野市の良い所の話をしてくれるかと思えます。ただ彼らには私の方からは「自分の経験も大事だけど地域の中に溶け込んで、地域の人とシンクロすること。それがないと絶対成功はしない」と言っておりますので、私からもいろんな所に市民の皆さんと交流することを望みますのでよろしく願いいたします。

諏訪東京理科大学ですけど、来年の4月に公立大学としてスタートする準備を進めております。授業料も今までの半分になりますので、皆さんの息子さん、娘さんも「東京まで行かないで理科大でしっかり勉強しろ」という形で受験していただければ嬉しいなと思えますので、よろしく願いいたします。

3点目の教育の分野につきまして、ここは教育長の方から簡単に取組の説明をお願いいたします。

教育長：皆さんこんばんは。茅野市の教育の一番大きな仕組みというのは、保育園と小学校の連携、小学校と中学校の連携という大きな枠の中で取組を行っています。保育園、小学校、中学校と一貫してとおしているのが読書活動の教育です。これはかなり効果が上がってきて、考える力があるということはもちろん、毎年文部科学大臣表彰を各学校で受賞しており今年度は湖東小でもらいました。かなり評価されています。保育園から小学校から上がった時に、小学校1年で一番学校が嫌だとか不登校が多くなりますが、他の地区と比べて極めて少ないということ。また小学校から中学校に上がった時に中学1年生で学校に来なくなってしまう不登校も極めて少ないです。小中一貫、幼保小連携という中で一つ良い方向に進んでいるのかなと思っています。来年度に向かって今年も一生懸命にやっている訳ですが、一つは新しい教育ということで「ICT教育」。11月中には各小中学校にテレビ会議システムが全てにつきます。北山小学校の場合、北部中学校に通う。あるいは湖東、米沢、豊平の子供達と同じように北部中学校に通う訳ですけど、交通の便で考えたときにいろいろハンデが出てくる中で、テレビ会議システムによってそのことは解消できる。意外と簡単に子供達同士との交流もできるということで、既に実験は上手く進んでいます。11月中に全部の学校に配置されるということです。来年度は大型テレビの導入とタブレットの導入を考えています。タブレットの方は一クラス分の人数全部を揃えるのが一番良いのですが、予算の関係もありますその前に大型テレビが無ければタブレットを入れてもみんな情報共有できないということで、来年度は大型テレビを中心に

タブレットも導入していきます。英語教育の方が平成32年度から新しい学習指導要領が実施となり、今までは5・6年生は35時間英語活動という形でやっていました。コミュニケーション能力をある程度とって楽しくということでしたけど、平成32年度から5・6年生70時間英語科という教科になります。文科省の方針は来年と再来年の2年間で移行させろと言うのだけれど、それをやるには一つは子供達の負担が大きくなる。もう一つは教科になったときに先生達が教えなければならない。本当に先生達が教えられるかと言うと、ちょっと大変なんです。それで3年間の移行期間を取って今年は台湾から英語の専門家の秋先生をお呼びして進めているところです。4月の最初の授業を見たときは、私はまだ何を言っているか分かったのですが、今行くとちんぷんかんぷんです。ただ子供達はパッと反応して差をつけられたんですけど、是非秋先生が来る日が週に1、2あるので見てみてください。また縄文科も先程市長さんが言ったように人としての大切さ、またある面ではなかなか答えの出ない教科なので自分で考える力を付けています。具体的に今日は校長先生が来られているので、簡単に説明していただきたいと思えます。

北山小学校長：お世話になっております。今年度、縄文ライフフェスティバルということで多くのプログラムが用意されまして、本校でもたくさんの行事に参加させていただきました。その中で子供達に非常に大きな育ちがあったなと思っている訳でございます。特に土器造りであるとか縄文の衣装作りであるとか、そういうものに子供達は夢中になって取り組んでいて自分ならではの土器を作ったり縄文の衣装を作っていました。今年は自分の土器のカタログを作ったりしながら縄文の学びを深めていく所でございます。

北山小学校教諭：私は今年初めて本校に赴任しまして、6年生縄文科ということでやってきた活動の一つは野焼きの体験です。それ以前にクラスで土器作りをしまして、保護者も含め全員参加した中で土器を作り、野焼きの体験も土曜日の夜でしたが、多くの保護者の方に来ていただきまして、子供達もとても楽しいイベントに参加させていただきました。また衣装作りということで縄文人が着た衣装はどういうものだろうということで、これも来ていただいた方を中心に2時間ぐらいの中で、自分達で工夫を凝らしながら考えて作業をしておりました。子供達は、縄文科に対して今の4年生もそうですけどいろんな活動をしてきているので、私自身が初めて赴任して6年生ということでありますが、子供達の中には縄文科というものが根付いているんじゃないかなと、いろんな活動を見て感じさせられている所です。

北山小学校長：先程、教育長の方からICTの推進の話がありました。先だって豊平小学校、北山小学校、湖東小学校でテレビ会議システムを活用して、どんな交流をしたいか話合いました。ちょうど明日、校長・教頭が集まってどんな交流を進めていくか、子供達の意見を取り入れながら進めていくところでございます。ちょうどそこにありますテレビの前に子供達が集まりまして、発言する姿が映り、声が聞こえるということで、北山小学校と豊平小学校は歩いて行く

には遠すぎる訳ですけど、そういうものを活用しながら小中一貫教育を進めていきたいと考えております。英語教育につきましては先程話がありましたとおり、35時間というのは週1時間を1年間続けると35時間になります。それを70時間になるということは週2時間英語教育を進めていくということで、先生方にもかなり負担がかかるわけですけど、勉強していただいて、世界に通用するひとつづくりを考えております。

北部中学校長：先程北山小学校長が言われたように、小学校同士の連携を深めながら、その子達を受け取る中学校として、小学校で学習したことを小中一貫という方法を使ってどんなふうに活かしていくかが課題になっていて、どういうふうに内容を系統的に勉強してくれば上手く繋がっていくかの準備をしてきました。縦軸の流れみたいなものと、今考えているものは先程の小小交流もありましたけど、同じ地域に住む人間として、集団としての意識のまとまりみたいなものをどうやって作って中学校を卒業させていこうかなと考えています。今日話題になっていることは中学校3年生ぐらいになると一生懸命彼らなりに考えていて、買物弱者の問題、農業の後継ぎの問題、人口減少の問題、そんなことをこの地域に住む一人として、市民の予備軍としての中学生みみたいなことを考えながら、小中一貫学校を行っていければいいかなと考えています。先日も中学1年生を連れて朝倉山に登らせていただきまして、あそこから見ると北部中から通ってくる地域が一望できる訳です。自分達がそういう所に住んでいて、この地域の一員としてその中で生活している。そこには縄文の数千年も前から人が住んでいた。今も人が住んでいて、いろんな課題を持ちながら生きている。そういう経験があの子達がどういう社会に出ていこうと、いつも課題と良さを活かしながら、解決しながら生きていくことが大事かなと、そういうことを小中一貫として考えています。

市長：ありがとうございました。そういう話を前提に皆さんの方からご発言をお願いいたします。

市民：今の英語教育、ICT教育は皆さんの方で上手くやったとなると一言言いたくなるんですね。今は保育園、幼稚園、小学校の子を見ても、要するに「物（ぶつ）」に対する体験が非常に乏しい。「物」が分かっていない。そういう所で映像化してくる。僕はとても不幸なことじゃないかと、早く言えば間違っていることではないかと。縄文科で上手く期待するしかないんだけど、徹底的に「ぶつ」に体験、取り組んで欲しいと思います。ですからひんしゅくを買うような言い方をすれば、川で泳いで死ぬような目に遭って、それで危険性ということを日々体験すべきだと思う。僕らのときは必ず川で泳いで、10年に一度ぐらいは一人や二人死んで。それで僕は川の危険性を知ったし、小さい子を連れていったときは「本当に気をつけろよ」と言う。そういうことの経験が全くなく、川じゃなくてプールで奪還できるか？絶対できない。そういうことに対する危機感を持たないと、いくらインターネットでやったって、あれは「絵」です。「ぶつ」がちゃんとなくては「絵」で想像できない。簡単なことを言えば、大相撲をテ

レビでみんな観てる。でもやっぱり現場で観るのは全然違う。プロ野球だってそうだ。テレビで観ると簡単で良い所を映してくれる。でも現場だと「見えないな、どこいったんだ」とやって全然違う。その違いがきちんと分かってそれに対して危機感を持たないと、子供に「野球はこうするんだよ、サッカーはこうだよ」と言って分かったようになることが、僕はとても怖いと思う。それが反論です。

市長：今日出席されている皆さんはほとんど納得して聞いてくれていただけたかなと思います。よく分かります。先程言い足りなかったかもしれませんが、やはりAIだとかIoTだとかの対応力も付けておかなくてははいけない。ただ茅野市の子供達はその反面、象徴的なのは縄文科でありますけど、おっしゃってくれたような体験もしっかり身に付けて、「たくましく、やさしい」そんな子供にしていきたいなと思っています。その体験するにはやっぱり親だと思います。皆さんが川で泳いだとありましたけど、自分の子供さん達を川に連れていってもらいましたか？私は息子が保育園の頃から川に連れて行って、子供だから結構水嵩がくるところまで平気で連れて行きました。川の丸石の上を歩くことで苔が生えていて滑るし、転べば痛いし。そういうことから転ばない方法、バランスを取る感覚は現場でなくては付かないと思います。そういう意味でこれだけ豊富な自然がありますから、親御さんがちょっと時間を作ってターザンごっこでも良いし、木登りを一緒にするとか。これは是非やりたいですね。

教育長：先生の言われるとおりで、ただ10年に一度川で溺れ死んだら困るなと思って。ICT教育と英語教育はいろいろな考え方があります。先生の言われることも一理あります。例えば広辞苑が新しくなったときに、手に唾をつけてめくるかパソコンでやるかと言ったときに、私は手に唾つけてやらなきゃ本当に言葉は身に付かないと。ただ茅野市の場合、いわゆる教育のグローバル化や21世紀を目指すという中で、その2つに対する抑止力と言いますか、対応する力をつけるということで一つ縄文科があります。非常に縄文科は泥臭い教科です。総合で生活の時間を作る訳ですが、先程言われたように泥を捏ねて火を焚いて、川で魚を取る学校もあります。とことん縄文科をやるということが一つと、茅野市の保育園で大切にしておりますのが外遊び。新しい学習指導要領では英語だとかICTだとかアクティブラーニングだとかあるんですが、それを保育園で先取りするのではなくて、子供らしく外遊びを大事にしています。もう一つが小中一貫に関わって言うと、いわゆる校舎を一体にして北中と北山小を一つにしてしまうという一体型を取らないで、小学校はそのまま残して地域との関わりを強くして、地域の特色を出した小学校をやっていく中で本当の体験をさせていく。その3つで具体的には考えます。地域の鉄山鉄道、まぼろしの柵、諏訪鉄道というのを子供達の一つの活動の中心にして、それに縄文科を被せて北山の特色を出そうとしています。他の小学校と一緒にするとそういう活動ができないので、分離型を大事にしています。先生の言われるようにICTや英語だけになったら本当に子供は育つかと思います。



市長：ありがとうございます。他にご発言どうぞ。

市民：うちに小学校の子供がいるんですけど、小学校の給食が他の所に委託になるかもしれないという話を聞いたんですけど。私達が小さい頃から小学校の給食は学校でみんな作ってくれて温かい美味しいものを食べていたのが、もし外部に委託でまとまって作ったのになつたらちょっと悲しいと思ったのですが、その辺りはどうなんでしょうか。

教育長：これから先のことなので分かりませんが、ただ私が長野市に居たときは9千人分を一つの給食センターで作っていたんです。味噌汁が味の調節するにも醤油を5、6本入れないとできない、おかずも1種類少ないみたいな感じがして、自校給食というのは維持していきたいです。給食で出していて余るものはセロリなんです。ところが茅野市の子供は生のまま出しても全部食べている。そのことを原村の小学校でそういうことがあって全国放送で自慢していたが、こっちの方がちゃんと食べていると思った。ただ出しているセロリもこの地域の地場産の野菜の良さということで美味しいし、トマトもとても美味しいし。やはり自校給食というのはお金の問題が関わらない限りやっていかれば良いなと思っています。

市長：補足いたします。今茅野市は保育園も含めまして、自分の所で給食を作っています。その職員さんは総合サービスの職員さんでございまして、なかなか今は人手不足でございまして。市としても総合サービスとしても良い自校給食を続けるために手を打たないと、このまま放っておけば人手不足で作れなくなってしまうという危機感もございまして。そういう中でそんなお話も耳にしたのかなと思います。教育長が言うように、基本的には自校給食は守っていききたいと思っておりますけど、そういう背景もあるということをご理解いただきたいと思います。逆に皆さんのお知り合いで総合サービスに行つて給食を作ってくれる方がいたら、是非応募してもらおうように言ってもらいたいです。そんなにすぐ困るという訳ではないですけど、結構人手不足で大変だという実態がございまして。他にございますか。

4番の「社会基盤づくり」につきまして、何かご発言はございましてか。

5番の「あらゆる主体による協働のまちづくり」についてはどうでしょうか。北山は市街地から遠い訳ですけど、「ゆいわ一く茅野」にまだ行ったことないという方がいらっしゃいましたら、何か下る用事がございましたら一回利用してみたいと思います。食堂がございまして、美味しい食事も提供していただけますので、昼飯を食べる感覚でもかまいませんので、一回見学をしていただくとありがたいかなと思います。また11月12日（日）に1周年記念ということでイベントがございまして。登山家の野口健さんも来て講演をしていただきますので、お時間ありましたら是非ご参加いただきたいと思います。全体をとおしてご発言ございましたらどうぞ。

よろしいでしょうか。これから後段の「北山の魅力とその活かし方」について意見交換をしてまいりますけど、その中でこの第5次総に絡んでのご発言でもかまいませんので、よろしく

お願いいたします。

北山地区コミュニティセンター所長：お手元に資料があるかと思いますが、地域の魅力についてですが、北山中にアンケートをとって皆様からご意見をいただいたというのではなくて、区長会の中で出してもらったものになります。この他にもあると思いますので、何かありましたらこの場で教えていただければと思います。よろしくお願いします。一つは「桜」なのですが、北山は標高が高いということで、桜の咲く時期が4月下旬からゴールデンウィークの頃ということで下の方の地域とはだいぶ違ってくるということで、聖光寺の桜や糸萱の桜、湯川の桜並木があります。そういった所を観光資源として活かしていきたいなというのが一つありました。もう一つ、最近そば畑が北山に増えてきてまして、そばの花を一つの農業の観光に活かしていけないかという、その2つが出ました。そういったものを活かしていきたいなということでもあります。他にもいろいろあると思いますので、この場で知恵をお借りしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございます。北山地区は魅力の宝庫じゃないかなと思います。パッと思いつくだけでも糸萱かぼちゃもございまして、白樺、蓼科中央高原、御岳等まさに魅力だと思います。またそれぞれの地区の人、人情も魅力かなと思っています。ただ魅力はあってもそれを上手く活かさない、具体的に金にならない。ちょっと語弊があるかもしれませんが、やはりその魅力を活かして良い意味で稼ぎにしていって、そういったサイクルがないと持続可能な地域になっていけないと思います。「こういったものを、こんな風に活用したら面白いんじゃないか」そんなご意見がいただければ本当に嬉しいなと思いますので、どんなご意見でもかまいません、ご発言をお願いします。

市民：観光についてなんですけど、私は宿泊業をやっております、茅野市に10数年前に移住してまいりました。お客様に説明するのに「茅野」という文字が読めないと。「蓼科」も読めないんですけど。そのときに市長さんに「分かり易く茅野をひらがなで表記とか、外国の方が来られたときにローマ字表記のChino-shiとかどうですか？」とお話をしたときに、同行した蓼科の仲間からも笑われましたけど、市長さんは「そういういろんな意見が聞きたいんだよ、また言ってくれよ」と励まされまして。また今回も素っ頓狂なことを言いますが、私が移住する前に「JRの茅野駅を蓼科高原駅に」というようなことがあり、賛否両論で実現しなかったと聞いているんですけど、駅名の変更というのはそれにかかる費用を地元が負担すれば変えられるような形らしいんですね、調べてみますと。その費用が莫大かもしれませんが、計画にも出ているように八ヶ岳の自然、八ヶ岳の魅力を発信していくことになると、今のJR「茅野駅」が「八ヶ岳駅」でも良いのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

市長：「駅名を」という話は前からございまして、まだ具体化はしていませんけど。まず一つの

ポイントとして、「八ヶ岳駅」で蓼科の皆さん大丈夫ですか？ということが分かり易い例としてあります。「蓼科高原駅」としたときに「八ヶ岳じゃないのか？」という声も必ず出ます。そういった意味で茅野市は贅沢な悩みがあるかなと感じます。軽井沢みたいに一つで括れない、そういう中でどういう駅名が良いのかなと。それが市民の総意でその駅名にするとすれば不可能ではないと思います。ただ非常に金がかかるというのも事実とお聞きしています。JRではなくて高速道路の「豊科インター」が「安曇野インター」になりました。あれは相当な金がかかっていると思います。でもあれは成功ですよ。本当は「諏訪南インター」を「八ヶ岳インター」になったら良かったのかもしれないなと思いますけど。

市民：要するに「茅野市」の知名度も「蓼科」「白樺湖」の知名度もあるのですが、世界的な知名度となると圧倒的に「八ヶ岳」だと思うんですよね。地域、エリアということよりも、一流のネーミング「八ヶ岳」というのがちょっと違った趣があるのではないかと思って発言させていただきました。

市長：ありがとうございます。せっかく今日ここに来て急にですけど、「茅野駅」でなくて「八ヶ岳駅」がいいんじゃないと思う方を挙げてください、と言っても挙げにくいかな。そうなったときに「八ヶ岳」しかない？

市民：「縄文」でも良い。

市長：そういったことも必要になってくるかなと思いますね。他にどうぞ。

市民：地域の魅力、将来像の案の中に「人と人とのつながり、コミュニティの絆、支え合い」そういったものが挙げられていますが、実は糸萱は年々人数が減少傾向にあり、蓼科中央高原は増加傾向にあるんですね。なぜ増加傾向にあるかと言うと古い集落は集落として人と人との繋がりが薄くて、コミュニティも絆も薄くて、支え合いもあまりなくて良いので人口増加に結びついていると考えられる部分が多いんですね。どうも人間的に考えないと茅野市の将来像は実現していかないのかな、という部分にも着目してもらいたいと思います。集落においては確かに繋がり、絆、支え合いが必要なんですけど、移住者を呼び込む部分ではそういった現実がある。蓼科中央高原も20年前はほとんどリアイア組が移住の中心だったんですけど、最近の子育て世代がたくさん増えてきているので、その辺の秘密も探る必要があるのかなと。「暮らしやすく、住み心地がいいまち」は人それぞれ違うのかなと感じています。一方で糸萱の私の自宅の隣にはやはり子育て世代の若い夫婦が住んでいて、最近赤ちゃんが生まれて今度2人目が来年生まれるなんて嬉しい状態であるんですけど、彼らの話を聞くと「田舎暮らしが私達には合っている」というので、さっきの蓼科中央高原の話とは真逆に田舎暮らしに価値観を見出してくれている人もいますので、多面的に一方だけじゃなく捉えていく必要があるし、糸萱の

ような古い集落はもうちょっとしがらみを逆に役職で切り捨てていく覚悟でも良いのかと。しがらみが嫌で集落から外周地区に住みたい人はたくさんいます。その辺りに目を持っていただくと移住促進というのも一つの人口減少に逆らう重要な柱だと思います。もう一つ理科大の所で触れたかったんですけど、地域の研究機関として産学連携というのが一般的なんですけど、是非諏訪の産業界で基金を作って、優秀な生徒を諏訪へ就職してくれば無償化になるような奨学金だとか、そういったものも是非売り出していただいて、大学生がそのまま諏訪へ住み家庭を持ち、というのも移住促進の一つに繋がるし、諏訪の産業の底上げ、将来に繋がると思うので一つのアイデアとして提供させていただきます。山梨大学では醸造科に進むと授業料が無償になるんですよね。50いくつかのワイナリーがお金を出し合って醸造業の育成をしていると聞いたことがあります。

市長：ありがとうございます。後段の理科大の方ですけど私もそんな仕組みがあれば良いなと思っておりまして提言もしています。理科大に来て卒業して地元の企業に就職したら授業料の免除とか。例えば諏訪中央病院は諏訪看護学校を出て3年間務めると、その看護学校のときにかかった授業料は免除になるという仕組みがございます。その理科大版ということだと思います。100%免除になるかは別としても、そういったインセンティブは企業等にお願いしてできることかなと思っていますし、それが一つの大学の魅力作りになり地元定着に繋がると思いますので、制度化していきたいなと思っています。前段ですけど、確かにその人の考え方がありますので一概にこれが良いということはないかなと思います。人との関わりがあるから良いという人もいますし、そういったしがらみが嫌だからという部分もありますけど、ただ程度の差はあったとしても、私は人間は一人では生きていけないと思っています。必ず誰かのお世話になってご恩を受けて生きていく、それに対してまるっきり自分一人で生きていくと思うことなんておこがましいと思っています。社会の中で生きていく、それに対して何らかの関わりは持っていかななくてはいけない。茅野市に移住してくる人達にも、個人的には最低そういう想いを持って移住してきて欲しいと願うところです。ただ程度問題もありますし、今の時代家族においても舅・姑と一緒に暮らす同居よりも近居の方が良いと言われています。適度な距離があった方が今の時代は上手くいくことも事実かなと思います。ただ「人と人との関わり合いを大切にする茅野市」ということは全面に押し出していきたいなと、これは個人的な想いですけれども。そんなことでよろしいでしょうか。他にどうぞ。

市民：一つはできるだけ茅野市を魅力的な所にするということで、若い人達を呼ぶということですね。オーストラリアに長く住んでいたことがございまして、オーストラリアの企業に勤めていたことがあるんですけど、非常にびっくりしたことに1ヶ月間の夏休みを義務付けられるんですね。とにかく人事部に「取れ」と。どういう仕組みになっているかというのと休みを取らないと給料に跳ね返ってきて、潜在的な債務に会社の方がなってしまうということで無理やり取らされると。1ヶ月も休んだらどうなるのかと最初の頃は罪悪感を感じていましたけど、そ

れだけ連休があるとどこにでも行けるし楽しいし、1ヶ月間海外旅行するとか、非常に経験できないことができる。僕の息子はアメリカで働いているんですけど、日本に戻って日本企業に就職するかなと言ったときに、休みの問題が彼にとっては大きかったです。日本の企業に行っても休みは本当に少ないし、祝祭日は多いのだけれどもそのときは非常に混んでいると。バラバラの休みしか取れないし、1週間まとまった休みも取れない。一方で海外の企業に勤めると一貫して休めると。そういうことを考えるとやっぱり魅力がないんですね。そういう問題は日本全体の問題でもあると思いますけど、年間の休みの数は増やさなくても、それぞれの祝日や休みを返上してまとめて2週間ぐらい休みが取れるとか、柔軟な対応を例えば茅野市が率先してやって、「茅野市で働いたらすごく柔軟に海外旅行もできるよ」というものをやるとすごく特殊になりますよね。お話を伺っていて町並みも素晴らしいことなんだけど、どこでもやっているような気もしまして、茅野市しかやってないというような独自性を出すということも。休みに関しては各企業さんの努力になると思いますけど、例えば茅野市役所が率先してそういう仕組みを自分達でやってきて、「毎年2週間まとまった休みを取れる」となると話題性はあると思います。茅野市役所が実験的にまずやっていただいて、それを企業さんがまねすることをやっていくと若い人が来る可能性が出てくるんじゃないかなという気がします。もう一つ、僕は別荘族だったんですけど、今は城ノ平に住んでいます。数百軒の家が建ってしまっていて、そこに永住しているのは6、7世帯だけです。その前に諏訪バス別荘にいたんですけどほぼ同じような状態で、何百軒という家が建っていて住んでいるのは5、6世帯。人口を増やすと言ってもあんまり年寄りを増やしてもしょうがないのかもしれないですけど、別荘を持っているお金持ちの人達がリタイアするような年齢に今差し当たっていると、団塊の世代ですね。引退する時期になってきまして、その人達もある程度は茅野市のことを知っていますので、彼らにリタイア後の住居として戻って来てもらう、こっちに来てもらうような施策もあるのではないかと。一番不安なのは体が動かなくなったときに老人ホームはどうなのかなと。東京の老人ホームというのはとても広いんですね。値段も高いです。一つ別荘族の良いところは彼らは金持ちなんですよ。そういう人達がここが良いとこだと資産ごと移り住んでくれれば、それなりに潤うと思います。そういう人達にも「老後は是非、茅野市に住みませんか？」と、「不安に関してはこういうことで解消できますよ」と。「東京よりも遥かに人間的に豊かに生活できますよ」ということで、積極的に別荘族に住んでもらうということをして良いのではと考えました。

市長：ありがとうございます。まず別荘の方から言いますと、茅野には約1万弱の別荘がごぞいます。これはよそにはない大きな財産でして、これをどう活用していくかは茅野市にとって、していかねばいけない課題として総合戦略、人口減少対策の一つとしても位置付けております。観光まちづくりにおいても別荘に対してどう働きかけていくかが大きなテーマだと考えておりました。しっかりと働きかけていきたいと思っております。かなりの知識人の方もいらっしゃいますし、そういった人達にも活躍してもらおうということで、理科大との連携というのも一つ

の具体的な対応にもなるかなと。講師として週に1回来てもらおうとか、月に1回特別講義をしてもらおうとか連携もできるのかなと思います。その反面、別荘地に定住されますと市民として普段の生活をしていく訳ですので、そこにどう対応していくかという逆の面の市としての責任の大きさ、大変さも出てくるかと思っています。そういう面も含めまして、1万弱ある別荘を上手く活用できたら茅野市の大きな達成になるかと思っていますので、具体的にどういうのが良いのか、良いご提案があったら起用したいなと思います。前段の休みの件ですけど、企業さんにいきなりやれと言ってもなかなか難しい面があるという中で、いろいろな機会の中で話をさせていただきたいと思います。本当は国単位でできればまさに働き方改革になるかと思っています。役所が率先してということはそんなに難しくないですかね。実際人は足りないですかね。

地域戦略課長：非常に素晴らしい提案でありありがとうございます。私も休みが取れたらやりたいことがあるんですけど。現実的に役所が一人1週間休み取れるかと言ったら、今の職員体制だとかなり難しいかと思っています。役所とは住民が一番ですし、ギリギリの体制でやっていますので、打ち合わせとかチームでやるような課もありますし。今残業をなるべく少なく、限られた時間の中で効率を上げて仕事をしようということで、夜の会議はシフト勤務と言いまして、ずらして勤め方を見直そうとやっています。それでもいろんなことで市民の皆さんにご迷惑をおかけすることも出てくるので、全体的な国単位の働き方を見直してゆとりのある勤め方ができれば良いと思いますが、茅野市の市役所が率先してというのは申し訳ございませんけど、かなり難しいです。ただ年休の消化というのは率先してやっておりますので、業務を効率よく行い休暇で、新しい世界を知るといことは大事だと感じております。

市民：確かに始めるのは大変なんですよ。でもやったらできるんですよ。僕も1ヶ月の夏休みでバリ島へ遊びに行って。それは一つの例ですけど、そういうまとまった休みを取ることによって随分視野も広がりますし、いろんなことも人生観・世界観が広がりますし、かなり無理をしてもやる価値はあると思います。またそれによって本当に優秀な人材が来ますし、それをみんなで協力し合ってやるんだということで、やればまわるんですよ。要するに他の所と何か違うことをしないと駄目ですよ。是非やって欲しい。あと先程言い忘れていたことを思い出したんですが、今インターネットとか発展していますし、それこそ先程のテレビ会議もできますし、あんまり場所ということが関係なくなってきた、要するに都会でやっているようなクリエイターやアーティストがやっているような仕事でも別に田舎でもできる訳ですよ。八ヶ岳の大自然の中でもできると。特にアーティストの話だと練習をするときに騒音の問題が凄くあるんですね。ピアノを練習するにしてもバイオリンを弾くにしても作曲をするにしても。そういう人達を活かして「茅野市は魅力的だな」と、「別荘地に住んでこれだけ大きな声でカラオケをやっても文句は言われぬ」というようなことで。今インターネットでカラオケもできるんですね。山の中で力いっぱい怒鳴っても絶対に文句は言われぬ。こういうのは一つのアピールポイントにできるんじゃないかな。それから永住するということに関して「冬が厳しいでし

よ」という話をされるんですけど、実際八ヶ岳の別荘地に住んで一番感じたのが、茅野市は冬が一番素敵なんですね。それは是非皆さん宣伝していただきたい。ここは青天率が非常に高いので、雪景色の中で晴天のときはまさに銀世界。山の方はこんなに明るいのかと非常にびっくりした記憶がございます。その辺りは是非アピールして「銀世界の蓼科」ということでやったら良いのではと思います。

市長：冬の茅野は良いなと思いますね。「冬が一番良い」というのを「冬も良い」という表現にして欲しいなど。個人的には新緑の芽吹きが一番好きですけど、それは個人それぞれありますから。前段の休みの問題ですけど、私もやればできると思う。これは地域戦略課の宿題にしておきます。いきなり1ヶ月が無理でも、頑張りましょう。

地域の課題や懸案事項等がかまいませんので、どうぞご発言ございましたらお願いいたします。

市民：先程別荘の方で老後を過ごす話がありましたけど、それについて現状をかいつまんで止めた方が良いよと言いたい。どうしてかという別荘に行くには今のところ効率が悪いんです。とにかく満杯で老人ばかりになったらそれは良いのだけれど、今の状態をいいますととにかく人がいないので、ヘルパーさんに行ってくれと言ってもどこにもいないんですよ。訪問に行ってくれと言ってもみんないい顔しない。片道30分以上かかるのだから、それはペイしないから嫌だと。デイサービスに迎えに行くのも嫌がられて行けない。つまり自宅で最期を過ごそうと思ったらそういうサービスが必要なんだけど、どこも良い顔はしてくれないです。露骨に断りはしませんよ。でも何だかんだとか言って使えなくなる。結局別荘に居ても、特養は結構空いて入り易くなりましたけど、特養老人ホームって最低20~30万払うと入れる所になるので、あんまり別荘で最期を迎えたいという人は、僕はどこだっていきますけど、今の段階ですととても難しいのであんまりお呼びにならない方がよろしいかと。

市長：ストレートに言われると身も蓋もなくなってしまうので。別荘がどんどんできた頃は所有者も若かった。車で来て自然を満喫したけども、車を運転できなくなってきたという中で特に蓼科、茅野市の別荘は2世代目、あるいは3世代目の人が所有者になっているんだろうなと思います。その中でどういう活用をしていくのかというのはいろんな面から取り組まなければいけないと思います。ただ、この1万戸ある別荘は財産ではあるかなということは間違いないと思っていますので、どういう形にしたら良い活用ができるか、是非皆さんもご意見をお寄せいただきたいと思います。

市民：蓼科山の登山口に市長に無理を言ってバイオトイレを作っていただいて、観光協会の方で管理をさせていただいておりまして、非常に好評です。今回の話ですが、登山道の方がクマザサとかがいっぱい生えておりまして、お客さんが非常に歩きづらくなっている。その辺の整

備の仕方とか草を刈ってよいのか、地元観光協会とも協力したいのですが、なかなか国の方では刈って欲しくないような雰囲気もあるそうです。とにかくお客さんが歩きやすくなるような登山道になれば、お客さんも増えていらっしゃるんじゃないかと思います。蓼科山は週末の度にお客さん来ていただいているので、その辺も研究していただいて、登山道を整備することを考えていただければと。

市長：登山道の管轄は多分国だと思います。国の方も「市が管轄するなら整備して良いよ」とか、そういった対応になると思います。なかなか全部登山道を市が管理するというと厳しいものがありますので、場所区切ってここを借り上げるみたいな対応をしていると思います。ちょっときちんとしたことが言えないのでまた回答いたしますけど、そういう中でどういう整備ができるかという話になるかと思います。

市民：市の方でもしっかり整備していただいたようなので、またご協力をお願いします。

市長：他によろしいでしょうか。

短い時間でしたけれども、皆さんの方から忌憚ないご意見をいただきました。また非常に良いご提言もいただきました。本当にこの茅野市が安全・安心して住みやすいまちにしていく、また良い意味で面白いまちにしていくことが大切かなと思っています。人口減少は避けられない部分だと思いますけど、それにめげることなく「やさしく、活力のあるまち」を作ってまいりますのでこれからもよろしくをお願いします。今日はありがとうございました。